

# 日本文章学院『新文壇』記事一覽

山 本 歩

## 一、本稿について

新潮社（明治三十七年まで新声社）の創業期から発展期を支えた重要な事業に、文章専門の通信講義録や作法書の発行がある。通信教育事業は明治三一年、大日本文章学会の名で始動し、三五年に日本文章学院に改称、その後大正一二年まで継続した。その詳細や意義については宮崎睦之（「独習」と〈添削〉と——佐藤義亮の講義録——）（『日本近代文学』第六〇集、日本近代文学会、平成一一年五月）、同じく宮崎「講義する雑誌、講義する書物——新潮社・明治四十年代、投書雑誌の黄昏にて」（『立教大学日本文学』第八二巻、立教大学日本文学会、平成九年七月）、及び山本歩「日本文章学院とその小説作法」（『尚綱語文』第九号、尚綱大学文化言語学部・現代文化学部・日本文学懇話会、令和二年三月）を参照されたい。

同事業の中心は文章専門の講義録であったが、そ

の付録として月刊投書雑誌『新文壇』が生徒たちに配布された。明治四一年一月から大正五年三月まで刊行された同誌は、大正五年五月創刊『文章倶楽部』の前身となる。第一巻は菊倍版一二〜一六ページ、第二巻から菊版四四ページ、以降紙数は増加していき六〇を超える。生徒からの投書欄が大部分を占めるが、作家の寄稿や講師・編者陣の記事も、第一巻は三〜四ページ、第二巻以降は一六〜二五ページ前後、掲載されていた。これらを便宜的に「講話記事」と総称する。講話記事以外の投書欄は基本的には「佳作」欄とされる（二〇〇点満点の点数制）が、後半期には上位優等生以下を「抒情叙事文」「評論文」「書簡文」「論文」など細分化する形で評価していた。また、巻末には通信・交流コーナーとして「倶楽部」（読者倶楽部）と題された時期もある。欄が設けられた。

『新文壇』は公刊が確認されておらず、同時期の『新

『新潮』や、『文章世界』（博文館）などと比較して影響範囲は小さい。記事はいずれも長いものではなく重厚さに欠け、後期においては『新潮』からの再掲も多い。そのため同誌の存在感は薄く、従来、仔細に検討されて来なかった。だが講話記事の傾向から窺えることは多い。そこでは『新潮』や『文章世界』とは異なる形で〈文学〉が営まれている。新潮社の若者向け購買戦略、自然主義から距離を取りつつその成果を流用していく指導、著者のラインナップ——真山青果や小川未明はロールモデルとして君臨し、やがて『文章倶楽部』を担う加藤武雄、小林愛川も陰に日向に活躍する——たとえ再掲記事であっても、その時、そこで、その記事が読まれたことに意義があるはずだ。何より日本文章学院という機関の実態を探る上でその検討は欠かせない。

そこで本稿では、新潮社の通信教育機関「日本文章学院」の機関誌『新文壇』の記事を一覧化する。ただし紙幅の都合から、投書欄については記載を割愛し、講話記事のみを一覧化している。ページ数の記載も省略した。初出・再掲については今後精査して

いきたい。よって決して完全なリストではないが、向後の研究資料として発表するものである。

タイトルと著者（「」内）の表記について、第六巻までは目次が存在しないため各記事の標題に依った。表紙に目次が記載された第七巻以降は、当該目次に依った。著者の記載がない記事は無署名記事である。

## 二、『新文壇』講話記事一覧

### ■第一巻第一号（明治四十一年一月）

修辭的技能と高調の趣味「高楠順次郎」／世論概観（文学入門者に「島村抱月」／帰郷偶感「永井荷風」／芸術と技巧「小杉天外」）／文芸講話（材料の取扱ひ方「小栗風葉」／散文詩に就て「水野葉舟」／星光「徳田秋声」／自然の色「緑痕生」／漁村の念仏「田口掬汀」）

### ■第一巻第二号（明治四十二年二月）

文士と性情「大町桂月」／諸文士の『響』観／文芸講話（旅行記の書き方「山崎直方」／音楽「柳川春葉」）

■第一卷第三号（明治四二年一月）

写生文と小説―事件の興味を忘却する苦痛―「高浜虚子」／世論概観（印象主義の傾向（新潮）「蒲原有明」／文章と言語（文章世界）「小杉天外」／日記に就て（中学世界）「沼波瓊音」／文芸講話（印象派の文学「島村抱月」）／旅情「小栗風葉」

■第一卷第四号（明治四二年二月）

新文芸の一新体―葉舟氏の『響』を讀みて―「相馬御風」／世論概論（予が作品に対する希望（新潮）「夏目漱石」／文才のほひ（文章世界）「大町桂月」／和歌新辞典出づ／文芸講話（注意力―觀察力「幸田露伴」）／別れ際「真山青果」／小品一篇「金子薫園」／本院講師筆跡（其二）「大町桂月」／久保得二「金子薫園」

■第一卷第五号（明治四二年四月）

文章の根本問題「山路愛山」／『父と子』を介す「一記者」／世論概観（女性描写に就きて（新潮）「小栗風葉」／自然主義の誤解（文章世界）／文章の著眼点（文章世界）／文芸講話（言文一致と修辭「島村抱月」）／泰西名作紹介（恋せし人の側に（ゲ

ーテー作）「内海月杖」／考の纏まる時「吉江孤雁」／本院講師の懇話会／渡守の親子「小栗風葉」／鴉の海「馬場孤蝶」／本院講師筆跡（其二）「小栗風葉」「生田弘司」「沼波武夫」

■第一卷第六号（明治四二年五月）

文章談義「夏目漱石」／文芸講話（言ふべき思想及び方法「佐々醒雪」）／世論概観（評論の權威（早稲田文学）「片上天弦」／短編の面白味（文章世界）「田山花袋」／充實した文章を書きたい（文章世界）「田山花袋」／旧型を脱せよ（新潮）「相馬御風」／泰西名作紹介（牧童（ハイネー作）「内海月杖」／痛恨録「徳田秋声」／空を見るべき時「R・S・T」／ニイチェ曰く「生田長江」／火「小林愛雄」／文章の規箴／終篇金色夜叉原稿

■第一卷第七号（明治四二年六月）

作文の真味「三宅雪嶺」／夏を謳歌せよ／世論概観（自己の爲の芸術也（文章世界）「小杉天外」／文芸は感情の産物也（新潮）「泉鏡花」／泰西名作紹介（『接吻』梗概（チエーホッフ作）「馬場孤蝶」／女（近著小品文集『夢』より）「真山青果」／湖

畔の美女「小栗風葉」／夏の感想「××××」

■第一卷第八号（明治四二年七月）

文章と品詞との関係「芳賀矢一」／旅行雑感「大町桂月」／漫語「相馬御風」／わが初恋の記「小山内薫」／旅の趣味「緑痕生」／旅硯「馬場胡蝶」／文士の筆蹟（島崎藤村「雜貨店」）

■第一卷第九号（明治四二年八月）

自分の文章を作れ「新渡戸稲造」／予が読書法「幸田露伴」／幼時の記憶「佐々醒雪」／物を観る稽古「島崎藤村」／小品二篇「水野葉舟」／余が自然の観方「三宅克己」／大阪講習会報告

■第一卷第十号（明治四二年九月）

文章と演説語「安部磯雄」／家庭と読書「佐々文学士」／予が書斎観「島崎藤村」／蝶を葬むるの辞「馬場孤蝶」／兄弟の祈り「徳田秋江」／鳥日記の一節「内海月杖」／顔の色「黒田清輝」

■第二卷第一号（明治四二年一〇月）

二種の文章「山路愛山」／趣味を広くせよ「上田敏」／秋懷二章「真山青果」／玄関番の見たる文士（二）小栗風葉氏／愛憎「小栗風葉」／移転問題「金子

薫園」／闇「葉舟」／『新書簡文』を介す「浩堂生」

■第二卷第二号（明治四二年一二月）

予が文章修行の経路「草野柴二」／雑誌へ投書すると云ふこと「生田長江」／玄関番の見たる文士（二）田山花袋／懇親会「森林太郎」

■第二卷第三号（明治四二年一二月）

文章上達の順序「小川未明」／真の文章術「徳富蘇峰」／文芸の趣味「徳田秋声」／玄関番の見たる文士（三）奥さん孝行の小杉天外氏／運命「小栗風葉」／明暗「金子薫園」／壁「水野葉舟」

■第二卷第四号（明治四三年一月）

予が文章上の経歴「沼波瓊音」／諸君への要求「太田水穂」／玄関番の見たる文士（四）万事低徊趣味の夏目漱石氏／農夫の娘「柳川春葉」／閑日月「阪本文泉子」

■第二卷第五号（明治四三年二月）

『日記新文範』と小林君「金子薫園」／作文実験談「佐藤紅緑」／今後の文章「三宅雪嶺」／『新書簡文』を読んで、金子講師及び本院に寄せられたる感謝状／玄関番の見たる文士（五）無愛想の正宗白鳥

氏／曉「小川未明」／文壇風聞記「蛸松」／交差点「三島霜月」

■第二卷第六号（明治四三年三月）

文章の調子と色「永井荷風」／俳句入門者に「内藤鳴雪」／玄関番の見たる文士（六）睡る暇もない小山内薫氏／講師消息（大町桂月、生田長江、佐藤浩堂、金子薫園）／文章問答／二才子「小栗風葉」

■第三卷第一号（明治四三年四月）

文章の新研究法「三宅雪嶺」／文章と競争心「大町桂月」／文学に顕れたる花「上田敏」／玄関番の見たる文士（七）骨董癖の柳川春葉氏／厩の馬「三島霜川」

■第三卷第二号（明治四三年五月）

ツルゲーネフの散文詩に就いて「志水生」／文章経験談「馬場孤蝶・生田長江」／論文の文体「金子筑水」／玄関番の見たる文士（八）胡蝶の様な水野葉舟子／相模の海「真山青果」

■第三卷第三号（明治四三年六月）

↓講話記事なし、投書欄のみ ※投書の増加のため

め、講話記事が省かれた

■第三卷第四号（明治四三年七月）

ツルゲーネフの散文詩に就いて「志水生」／『二家族』を読む「中村霞山」／本院の講習を了へたる諸君に告ぐ／改良を加へたる新潮見本 ※投書欄なし

▼以下、投書数の増加のため、第三卷第五号（明治四三年八月）から第四卷第三号（明治四三年二月）にかけて、講話記事なし、投書欄のみの誌面構成となる。第四卷第四号にて講話記事が復活。

■第四卷第四号（明治四四年一月）

動く絵と新しき夢幻「小川未明」／小説の中の会話「真山青果」／文章の進歩と退歩「幸田露伴」／北国の色「松原至文」

■第四卷第五号（明治四四年二月）

『新叙景文範』を介す「浩堂生」／文章と言語「藤岡勝二」／故郷の冬の印象「小川未明」／幻想「三

島霜川」／文芸問答

■第四卷第六号（明治四四年三月）

最良の修辭法「島村抱月」／長文と短文（附、懸賞短文選評余談）「金子薫園」／絵筆の思ひ出 火の河の跡「丸山晚霞」／幻覚「モオパッサン」／懸賞短文披露／文芸問答

■第五卷第一号（明治四四年四月）

端書さだより／※／青年の行くべき路「桑木嚴翼」／巻頭の『端書集』「浩堂生」／小説と脚本との取扱ひ方「坪内逍遙」／小説の題「徳田秋声」／「小栗風葉」／玄関番の見たる文士（六）魔性の生れ变りの泉鏡花氏／雀の巢「真山青果」／さとぶし「内海月杖」／懸賞文に就いて

※グラビアとして投書家たちの顔写真のグラビアが掲載

■第五卷第二号（明治四四年五月）

私の考へてゐる事「徳富蘆花」／文章と趣味品性「大町桂月」／文章上の経験「中島星湖」／夢に得た著作／我が国最初の新聞／諸家の恋物語（二）霧のやうな暖かな記憶「片上天弦」／夜航船「徳田

秋声」／文芸問答／批評の批評

■第五卷第三号（明治四四年六月）

紀行文について「小島鳥水」／理想的の旅「久保天随」／夏の俳句「沼波瓊音」／小説の題（二）幸田露伴・高浜虚子・塚原洪柿／諸家の恋物語（二）山の荒寺で見た女「窪田空穂」／盃中の味「小栗風葉」／下駄「上司小剣」

■第五卷第四号（明治四四年七月）

本院創立十周年記念／価値のない文章「矢野龍溪」／わが文章の過ぎ来しかた「大町桂月」／『五人女』を読む「薫園生」／銷夏の一策「藤代素人」／小説の題（三）「長谷川二葉亭」／自殺する女「秋田雨雀」

■第五卷第五号（明治四四年八月）

本院創立十周年記念／今後の論文「金子筑水」／『枕の草子』と清少納言「沼波瓊音」／清少納言と田山花袋「薫園」／執筆の実際（其一）「徳田秋声」／其二「遅塚麗水」／其三「柳川春葉」／其四「幸田露伴」／感興Ⅱ構想「小栗風葉」／小説の出来る時「菊池幽芳」／文士の好きなもの嫌ひなもの

／日没頃の空の色 忠実に叙景の筆を執らんとする人は科学者の説明に注意せざる可からず「石川成章」／文壇の隠れたる事実／海辺より（紀州小八幡にて）「真山青果」／高原「小川未明」／「貴族の家」を諸君に薦む「一記者」

■第五卷第六号（明治四四年九月）

人生を描くと云ふ事「島村抱月」／再び逢はざる悲み「小川未明」／予が文章の経路「島村抱月氏談」／小説の文章・モデルの取扱ひ方「徳田秋声」／事実と著想「泉鏡花」／感想二つ三つ「真山青果」／文士三世相「赤い卜星」／紀行文の面白味「大町桂月」／山と水との回想「遅塚麗水」／平面描写Ⅱ作家主観の反映「片上天弦氏談」／旧都の印象「松原至文」

■第六卷第一号（明治四四年一〇月）

小説を読む若き人に「長谷川天溪」／平家物語の叙事「内海月杖」／恥とは何ぞ——自己の活き方「真山青果」／書齋より「松原至文」／文壇聞き書／講話二種（円みのある作品「金子薫園」／作の上の自由）／最初の接吻「永井荷風」

■第六卷第二号（明治四四年一二月）

現代の文学に就て「馬場孤蝶」／秋と味覚「三島霜川」／私が文学に志した初め「永井荷風」／文壇五名家の初対面録（一）森鷗外先生／憶出の記「小栗風葉」

■第六卷第三号（明治四四年一二月）

脅かされざる生活「小川未明」／真の作家、批評家「金子筑水」／風の吹く日の興味「吉江孤雁」／文壇五名家の初対面録（二）坪内逍遙先生／文壇聞き／自殺「真山青果」／少年の日「岩野泡鳴」／愛儂「遅塚麗水」

■第六卷第四号（明治四五年一月）

平家の人々「高須梅溪」／余裕ある文章「高浜虚子」／予が日常生活（一）「徳田秋江」／（二）「小川未明」／歌集『山河』を薦む／山焼くる火「三島霜川」／投影「吉江孤雁」／墓場「福永挽歌」

■第六卷第五号（明治四五年二月）

文章を作り初めた頃「三島霜川」／新しい文学者の立場「馬場孤蝶」／感想録「高田の人」／藤村・花袋・秋声三氏の技巧（※）／『山河』を読む「小

林愛峰」／俠艶録を読む「浩堂生」／人から受けた印象（一）祖父母―バアナード・シヨ―「中村吉蔵」／歩きながら得る材料「泉鏡花氏談」／郷信「相馬御風」

※無署名だが岩野泡鳴の論を引用したもの

■第六卷第六号（明治四五年三月）

人生に対する興味「近松秋江」／私の欲してゐる批評家「永井荷風氏談」／自伝の一節「徳田秋声」／青年時代の独歩氏／明治文壇の恩人（二葉亭の人格と事業）「浩堂生」／人から受けた印象（二）私の頭から造り出した中江先生「小杉天外」／春の植物園「北原白秋」／春のおとづれ「相馬御風」／白鷗「白柳秀湖」

■第七卷第一号（明治四五年四月）

温帯から受ける思想の力「竹越三叉」／批評の真意義「徳田秋声」／私が影響を受けた愛読書「高安月郊」／自伝の一節「田山花袋」／私の青年時代「吉江孤雁」／拔萃帖から「泉鏡花」／前号佳作の批評「一講師」／林間の焼肉「若山牧水」／独りで思つてゐながら「水野葉舟」／午前一時「ボ

ドレール」

■第七卷第二号（明治四五年五月）

自己補足の文芸「片上天弦」／小川未明の文章「佐藤浩堂」／真実の声「徳田秋声」／幼い頃の記憶「泉鏡花」／風景の印象「中澤弘光」／前号佳作批評「一講師」／青い色「小川未明」／鶏（小品文）「三津木春影」

■第七卷第三号（明治四五年六月）

西鶴と三馬の文章「佐々醒雪」／『型』と『殻』「真山青果」／文壇に入れる径路「後藤宙外」／少年の笛を讀みて「昇曙夢」／小説のヒロイン／名文評釈「徳田秋声」／前号佳作批評「一講師」／最後の一節「佐藤浩堂」／渡船（日記より）「水野葉舟」／夜（小品文）「岡本靈華」／夏の歌

■第七卷第四号（明治四五年七月）

森の描写「水野葉舟」／添削しつゝ、「一講師」／十五年前の文壇「三島霜川」／小説の読み方「相馬御風」／夏の女「鈴木三重吉」／顔の印象「小栗風葉」／名文評釈「浩堂生」／歌の出来る時「金子薫園」／前号佳作の批評「一講師」／偽る者の



悲哀「真山青果」

■第七卷第五号（大正元年八月）

話と文との連鎖「坪内逍遙」／発見と創造「中村星湖」／歴史は活ける芸術也「潮虹生」／旅から受けた印象「蒲原有明」「吉江孤雁」／前号佳作批評「一講師」／母校に居た時代「島崎藤村」／小説を書く人の為に「三島霜川」／名文評釈「一講師」／山雀小籠「真山青果」

■第七卷第六号（大正元年九月）

文学者の行くべき道「後藤宙外」／会話を書く上の苦心「小栗風葉」／女心理描写「島崎藤村」／名文評釈「一講師」／高等学校時代「小山内薫」／秋「相馬御風」／前号佳作批評「一講師」／故郷のおもひで「片上天弦」／水国の初秋「水野葉舟」

■第八卷第一号（大正元年一〇月）

文学の与ふる利害「山路愛山」／空中飛行と官能の文学「栗原古城」／口語と莊嚴の文章「島村抱月」／前号佳作批評「一講師」／名文評釈「一講師」／新しい叙景文「吉江孤雁」／街はづれ「水野葉舟」／貧者の眼「蒲原有明」／日曜日の鐘声「三津木

春影」

■第八卷第二号（大正元年十一月）

有生命の文章「長谷川天溪」／単純と複雑「金子薫園」／新しい文体「蒲原有明」／南露の近代芸術家「馬場孤蝶」／前号の批評「一講師」／薄暮「高須梅溪」／東京の空「水野葉舟」

■第八卷第三号（大正元年十二月）

明治の翻訳家「春江」／唇の話「黒雲子」／考へて居る事「岩野泡鳴」／外界の印象と自己「中村星湖」／前号文叢の批評「一講師」／名文評釈「一講師」／読書の新味「馬場孤蝶」／冬の国「吉江孤雁」

■第八卷第四号（大正二年一月）

叙景の二方法と三段階「三島霜川」／クラシックに就て「永井荷風」／『死の勝利』研究会を起すの議「記者」／暖爐の前「諸講師」／『死の勝利』を薦むる所以「森田草平」／作家と天分「正宗白鳥」／質疑応答「一講師」／前号の批評「一講師」／バルタザール梗概「馬場孤蝶」

■第八卷第五号（大正二年二月）

新しき叙景「小川未明」／死の勝利研究会「生徒

諸子」／貧しき経験「水野葉舟」／新聞紙の経営「某氏談」／読書と記憶「島村抱月」／前号の批評「一講師」／質疑応答「一講師」／雛罌粟の花「三津木春影」／おもひ出「岡本霊華」

■第八卷第六号（大正二年三月）

警句に就いて「坂本文泉子」／藤村氏の渡欧「新文壇記者」／字引しらべ「×××生」／死の勝利研究会「生徒諸子」／西鶴の片鱗「真山青果」／明治の二文豪の死「道村春川」／広津柳浪」／ボドレエル小品「無名氏訳」／質疑応答「一講師」／前号の批評「一講師」／生徒諸君に望む「一講師」

■第九卷第一号（大正二年四月）

新描写法「真山青果」／復活祭の夜「松原至文」／破戒の文章「一講師」／質疑応答「一講師」／前号の批評「一講師」／文学講義録に就いて「一講師」／相国寺「浩堂生」

■第九卷第二号（大正二年五月）

新描写法「真山青果」／自然の調子を得よ「佐藤浩堂」／名文評釈「大町桂月」／前号の批評「一講師」／ワイルドの警句「一講師」／森鷗外氏の

一面「賀古鶴所」／新しき理想「小川未明」／文学講義の発刊「記者」／質疑応答「一講師」／憧れ心地「小栗風葉」

■第九卷第三号（大正二年六月）

文章と工夫「小林愛川」／青年諸君に「島崎藤村」／新しい文章「MB生」／新描写法「真山青果」／前号の批評「一講師」／名文評釈「徳田秋江訳」／戦塵「佐藤紅緑」／エンラン躑躅「小川未明」

■第九卷第四号（大正二年七月）

内容を養ふこと「小林愛川」／夏の自然の色と自然の力「蒲原有明」／夏の自然「小川未明」／感覚描写に就いて「佐藤浩堂」／前号の批評「一講師」／名文評釈「松原至文」／小説の題「徳田秋江」／旅なる夫へ「草野柴二訳」

■第九卷第五号（大正二年八月）

文章の調子「佐藤浩堂」／名文評釈「一講師」／十年後の文士「預言者」／新描写法「真山青果」／諸家の文章「沼波瓊音」／前号の批評「一講師」／『煙』に就いて「小林愛川」／恋の火「佐藤紅緑」／山国の馬車「小川未明」

■第九卷第六号（大正二年九月）

顔と服装「徳田秋声」／若き人々に「諸名家」／文章の種別「小林愛川」／女流作家初対面録「亀村生」／新描写法「真山青果」／『文学新語小辞典』「浩堂生」／前号の批評「一講師」／山焼くる火「三島霜川」／小品文に就て「一講師」

■第十卷第一号（大正二年一〇月）

秋に動さるゝ気分「相馬御風」／全力的事業「佐藤紅緑」／現時文壇の三大家「KS生」／初学者と写生「秋声」／葉舟」／新描写法「真山青果」／異字同訓解「一講師」／女流作家初対面録「亀村生」／秋の歌／名文評釈「大町桂月」／前号の批評「一講師」／秋いろ／「諸名家」／秋景雄興「草野柴二」

■第十卷第二号（大正二年一一月）  
懸賞文発表

■第十卷第三号（大正二年一二月）

本年第一の傑作「小林愛川」／描写の実際「真山青果」／日記は忠実に記せ「吉江孤雁」／「水野葉舟」／暮れ近し「金子薫園」／美人の印象「紀淑雄」／「日記の会」を開く「一講師」／異字同訓解「一講師」

／名文評釈「一講師」／訂正懸賞文発表／日本人と官能「某名家」

■第十卷第四号（大正三年一月）

現代作家評論（二）田村俊子「小林愛川」／描写の実際「真山青果」／世界的大傑作「サアニン」の研究を勧む「一講師」／異字同訓解「一講師」／「煙」の思ひ出「柴田流星」／名文評釈「一講師」／文章の工夫「泉鏡花」／霊の目ざめ「緑川春作」

■第十卷第五号（大正三年二月）

新しき叙景「小川未明」／描写の実際「真山青果」／生徒諸君に「一講師」／前号の批評「一講師」／「サアニン」評「四名家」／異字同訓解「一講師」／「血煙」を読む「小林愛川」／お夏清十郎「緑川春作」／途上にて「水野葉舟」

■第十卷第六号（大正三年三月）

人物を描く用意「正宗白鳥」／緑川春作氏に「小林愛川」／男の心をそる女性「徳田秋江」／地方色の研究「水野葉舟」／前号の批評「一講師」／名文評釈「一講師」／異字同訓解「一講師」／「復活」談「A—B—C」／小説 一夜「小栗風陽」

■第十一卷第一号（大正三年四月）

明治の四恩人「XYZ」／二人の女「鈴木鼓村」  
／地方色の研究「吉江孤雁」／郷土と作家「小川未明」／前号の批評「一講師」／異字同訓解「一講師」／晩春初夏の頃「水野葉舟」／露西亞の生活「瀨沼夏葉」

■第十一卷第二号（大正三年五月）

最近の感想「小川未明」／巴里の女「橋本邦助」  
／都会「真山青果」／名文評釈「一講師」／地方色の研究「森田草平」／感想文に就て「相馬御風」  
／前号の批評「一講師」／出版だより「一記者」  
／婚礼の曲「草野柴二」

■第十一卷第三号（大正三年六月）

心持はどう描くか「本間久雄」／『郷愁』梗概「佐藤浩堂」／ピエル・ロチに就て「後藤末雄」／夏の女「相馬御風」／大津より「徳田秋江」／前号の批評「一講師」／夢の研究「水野葉舟」／婚礼の曲「草野柴二」／マダム・ボワリーに就て「一記者」

■第十一卷第四号（大正三年七月）

本院高等科 文学部優等者の成績発表

■第十一卷第五号（大正三年八月）

未明と三重吉「片上伸」／地方色の研究「高安月郊」  
／八月の記憶「小川未明」「佐藤紅緑」／断頭台に上つた刹那の実感「米川正夫」／多作可乎、節作可乎「徳田秋声」／『新潮文庫』の発刊「一記者」  
／前号の批評「一講師」／婚礼の曲「草野柴二」  
／イギリス波止場「福永挽歌」

■第十一卷第六号（大正三年九月）

投書家論「無名氏」／感想文に就いて「相馬御風」  
／秋を迎ふる情緒「近松秋江」「三島霜川」／前号の批評「一講師」／「エルテル」の悲み「道村春川」  
／発売部の五分間「ABC」／余と大陸文学「馬場孤蝶」／余の投書家時代「田山花袋」／ロチの作風「一講師」／当方奇聞「生方敏郎」

■第十二卷第一号（大正三年一〇月）

人生の真の意味「徳田秋声」／海辺にて「真山青果」／秋の歌五首「諸家」／現代思想講話「一講師」  
／前号批評「一講師」／熱して書くと冷めて書く  
と「中村星湖」／俳句練習二題「沼波瓊音」／新

文範三則「道村春川」／新人情噺「近松秋江」／名家訪問記より「B生」／「クレオパトラの一夜」【A B C】

■第十二卷第二号（大正三年一月）

現代思想講話「一講師」／牡蠣（チエホフ）「松原至文」／競作・読書・暗誦「大町桂月」／慌だき生活の悲哀「徳田秋江」／最新文章の研究（小川未明の句）／作文日記に就て「一講師」／西鶴の五人女「×××」／私の崇拜した人々「吉江孤雁」／名作選集を介す「二記者」／『坊っちゃん』物語【A B C】／魔性「長田秀雄」

■第十二卷第三号（大正三年二月）

厭世文学「一講師」／小路「真山青果」／人物描写「中村星湖」／天才北村透谷「道村春川」／透谷の面影「北村美那子」／『春』の中の人物【A B C】／初日の出「一講師」／生活と色彩「小川未明」／バルザックの逸話「一講師」／いかなるを真の名文といふ乎「佐々醒星」／最新文章の研究「二講師」／肉のまどはし「生方敏郎訳」

■第十二卷第四号（大正四年一月）

現代思想講話「一講話」／高山樗牛「徳田秋江」／天才の片影（一葉に就て）／湖畔の少女「吉江孤雁」／文章雑誌「水野葉舟」／『わが袖の記』を読む「二記者」／最新文章の研究（島崎藤村の句）／年賀状のいろ／＼【A B C】／卒業試験に就いて「一講師」／ロメオとジュリエット「小林愛川」／一葉の『たけくらべ』【高山樗牛】／トルストイの『性欲論』【相馬御風】

■第十二卷第五号（大正四年二月）

創作雑誌「徳田秋声」／近代思想七回講話（第一回 近代思想とは何ぞや／第二回 文芸復興）／「一講師」／二葉亭の「平凡」【二講師】／人妻と蕩児と（アナトール情話集より）／文章に於ける死んだ言葉「水野葉舟」／お里さんの記憶【岩野泡鳴】／最新文章の研究（泉鏡花の句）／ビョルンソンの山嶽小説「吉江孤雁」／二大家の動物描写「愛川生」／「フョーランドの娘」から「野尻抱影」

■第十二卷第六号（大正四年三月）

複雑と単純「一講師」／近代思想七回講話（第三回 希臘主義と希伯來主義）【二講師】／芳醇無比

の文章「一記者」／『舞鶴心中』について「近松秋江」／背景のある歌「金子薫園」／最新文章の研究（永井荷風の句）／『罪と罰』の印象「内田魯庵」／『高野聖』の一節「泉鏡花」／文壇一百人「ABC」

■第十三卷第一号（大正四年四月）

文章雑誌「徳田秋江」／近代思想七回講義「一講師」／土蜂の唸る午後「真山青果」／黒い棺「緑川春作」／「舞妓姿」の作者より（幹彦）／「金子薫園集」を読む「中村伝二」／「今戸心中」の一節（柳浪）／「御風論集」を読む（愛川生）／小品文の作り方「水野葉舟」／椿咲く島「橋本邦助」

■第十三卷第二号（大正四年五月）

若き作家の為に「内田魯庵」／晩春「金子薫園」／近代思想十回講義「一講師」／トルストイの人物描写「本間久雄」／文章の気合「上司小剣」／最新文章の研究（鈴木三重吉）／夏の女「相馬御風」／『蒲団』と『縁』の女主人公「ABC」

■第十三卷第三号（大正四年六月）

多読乎多作乎「内田魯庵」／小夜ちどり「長田幹彦」

／神経の描写「本間久雄」／夏六題「一講師」／若い心のあと「TK」／夏の天地「田山花袋」／夏のいろ／＼「齋藤興里」／「八杉貞利」／作歌の経験「一講師」／銀座の夜「金子薫園」／国木田独歩と『運命』「相馬御風」

■第十三卷第四号（大正四年七月）

海潮の響「吉江孤雁」／父（ビョルンソン）「生田春月訳」／自然と人間「鐘田芳花」／須磨明石「沼波瓊音」／「小夜ちどり」を読む「秋山史朗」／「ハムレット」の一節「久米正雄」／明治の詩歌「一記者」／さまざまな青年の悲劇「KN生」／自然描写について「小川未明」

■第十三卷第五号（大正四年八月）

「お菊さん」「安倍能成」／「妻」に現はれたる二つの恋「水野葉舟」／祇園夜話／泡沫の輝き「沼波瓊音」／女三題（名文評釈）／思ひ出す事ども「鈴木三重吉」／作文の第一義「一講師」／家庭に於ける田山花袋氏／「たけくらべ」を読む「森ゆみじ」／日蓮上人と高山樗牛「山川智應」／況後録の一節（高山樗牛）

■第十三卷第六号（大正四年九月）

表情の描写「水野葉舟」／白昼の思ひ「田村俊子」  
／「三味線草」より「一記者」／思出の記「徳田秋声」  
／秋のうた（島崎藤村）／名文四章「一講師」  
／私の欲してゐる女「鈴木三重吉」／「恋ざめ」と「恋  
ごころ」「ABC」／両大家の技巧「徳田秋江」  
／漱石先生と秋声先生「王春嶺」

■第十四卷第一号（大正四年一〇月）

秋声のあらくれ「近松秋江」／海辺にて「真山青果」  
／秋の自然を描いた名文「ABC」／秋二題（百  
日紅「上司小剣」／白挽の唄「相馬御風」）／名文  
二章「一講師」／抒情文に就いて「水野葉舟」／「地  
獄に」序す「江馬修」

■第十四卷第二号（大正四年十一月）

出世作物語「ABC」／けふ此頃「薫園」／投書  
家の文章「徳田秋声」／恋の場面「一講師」／露  
西亜の文学と日本の文学「昇曙夢」／倫敦塔「金  
子薫園」／「文章日記」について「一記者」／詩  
人としての藤村「三木露風」

■第十四卷第三号（大正四年十二月）

小羊「中村白葉訳」／雪嶺氏の日常「XYZ」／

鎌倉より祇園へ「吉井勇」／祇園歌集を読む「一  
記者」／夢の話「未明、露風」／生活のスケッチ「黄  
金冠」／灰色の空「秋田雨雀」／新描写辞典に就  
いて「一講師」／露西亜文学者の生活状態「ABC」  
／畿内の街々「徳田秋江」

■第十四卷第四号（大正五年一月）

霊のなげき「道村春川」／或る女の裏面「小川未明」  
／「金子薫園集」の増版について／はつ恋の思出「T  
H生」／予が文章講義録を読みし思出／「はつ姿」  
の一節（小杉天外）／「小夜曲」を読む「小林愛川」  
／名文評釈「一講師」／貉（小泉八雲）「ABC訳」  
／雲のいろ／＼「KW生」／生活のスケッチ「黄  
金冠」

■第十四卷第五号（大正五年二月）

文章家となる道「沼波瓊音」／雲のいろ／＼「K  
W生」／女の一生―「奔流」の照子―「一記者」  
／「サフォ」の印象「一記者」／文話二則「大町  
桂月」／蛇遣ひ「吉江孤雁」／「お艶殺し」の一  
節「一記者」／明治初年の新聞雑誌「塚原洪祐」

／名金を介す「一記者」

■第十四卷第六号（大正五年三月）

福沢先生の文章「鎌田栄吉」／危険なる求婚（ビ  
ヨルンソン）／早熟の三詩人「B M 生」／早春の  
こと「浩堂生」／女三人（名文評釈）／料理屋の  
お神さん「徳田秋江」／伯爵と女記者（名金の一節）  
／箕輪心中の一節「一記者」／前号の批評「一記者」  
／文章訓六則「大町桂月」

【付記】『新文壇』の調査は株式会社新潮社資料室、

昭和女子大学図書館、日本近代文学館の所  
蔵物に依り、各施設のスタッフにご助力い  
ただいた。記して謝意に代えさせていた  
きます。

・本研究はJSPS科研費（20K12940）の助成を受けた  
ものです。